

「ぐっ、い、痛い、うっ……あああつ、痛いよお、誠司っ」

誠司がぐっと腰を進めたとき、伸びきった輪ゴムが切れたような気配とともに、ひとときわ鋭い痛みが腰の奥にひろがる。

「きゃあああああつ!!」

悠里の喉から絶叫があがった。喉の痛さを覚えたとき、引き裂かれるのではないかと思うほどの結合部の苦痛がフツと消える。

血の匂いがした。少しだが出血しているようだ。

ペニスはさつきまでの挿入の困難さがウソのようにぬるぬると入りこみ、子宮口を押しあげてとまった。

誠司は男根を膣奥まで収めたまま、処女の味を堪能たんのうしていた。開かれたばかりの隘路あいろは、成熟した女性のようにねっちよりした感じはないものの、生真面目まじめにキュウキュウと締め、次の瞬間には触れているか触れてないかわからないほどの強さで肉竿にまとわりついてくる。

締めつけの力がフツとゆるんだときの、小さい舌がいつせいに舐めあげるような、膣壁のヒダヒダのザワめき具合がたまらない。

「痛いかな?」

「い、今は、あんまり」

「おまえのオマ×コ、すげえ締まる。具合がいいぜ」

「いいの？ 私のアソコ？ 私、女に、なれる？」

「ああ、おまえは、いい女だよ」

誠司の甘い言葉に「反応したように、濃い愛液と破瓜出血がドロリとこぼれた。誠司のペニスを塗りつけるように、膣壁がウネウネとうごめく。

「動くぞ、いいな」

悠里はきよとんとした顔をした。動く、という意味がわからなかったのだ。

誠司は、悠里の返事を待たず、肩に手を置くと前後運動を開始した。

「えっ、ちょ、ちよつと、せ、誠司っ？」

ヒリつく膣壁を擦過され、さらに子宮口を亀頭で叩かれた悠里は、びっくりして誠にしがみつこうとした。背中で両手首を拘束されているため、動かすことのできな
い腕がひどく痛む。

「だ、だめっ。や、やめてっ、ひあああっ!!」

悠里は脚を誠司の腰に絡めようとして腰を揺らした。背中で縛られた手首のせいで腰が浮いているせいで、もっと奥までペニスを入れてちょうだい、と秘部を突きだし

て腰を揺すっている感じになる。

無意識の媚態が、誠司の興奮を煽った。誠司は悠里の太腿を肩に乗せると、上から二つ折りにするようにして、さらに激しく腰を使う。

「せ、誠司、怖いっ！」

「痛いかな？」

「だ、だいじょうぶ、怖いだけ、お願い、や、やさしくしてっ」

膣壁は、痛いというより、痺れあがったようになってしまい感覚がなくなっていた。だが、誠司は、悠里の懇願によけいに興奮を煽られたというように、ストロークを強くした。

あまりにも激しく身体を揺さぶられ、なにがなんだかわからない。人力俵じんりきしやに乗せられて、振りまわされている気分だった。

腰を打ちつけられるとき、陰毛がクリトリスをザリツとこするときの痛いほどの刺激と、亀頭が子宮口を押しあげるときの、ズウンと重い衝撃が同時にやってくる。

「うっ、うっ。悠里っ。締まる、キュウキュウ締まるっ。悠里いっ！」

誠司がうめいた。

悠里の膣壁は、成熟した女性のようにやわやわと包みこんでくる感じがしない。どこ



か生硬でキシキシしているのだが、それが入口から奥にかけて順繰りに締まっていく。生真面目な締まり方は、誠司に新鮮な興奮をもたらした。

「い、いや、誠司っ。お、奥、だめっ、奥、い、痛いっ」

悠里は悲鳴に近い声をあげた。子宮口を押されると、腰の奥が殴られたように、重くて太い刺激が背筋を伝って走り抜け、目の裏から抜けでていく。目から星が飛ぶのではないかと思うほどだ。

膣奥深くペニスを穿たれるとき、子宮口が龟头に押しあげられ、膣の奥からドロリと溢れる子宮頸管粘液が、男根にネットリと絡みつく。

折り畳んだヒダヒダを内に収めたような複雑な形状の膣壁が、きつく締まる感触は、まるで早く精液をちようだいと催促しているようだった。

「うっ、で、出るっ。悠里っ、悠里いっ！」

誠司が、ひときわ強く突き入れたとき、膣奥がジワツと熱くなった。

射精がはじまった。

「い、いやああっ。せ、誠司っ、ひどいっ」

誠司は深く腰を打ちつけたまま、射精の快感に目を細めている。

——どうしよう。赤ちゃんができちゃう……。

悠里は、子宮口を叩く痛いほどの精液の感触に、絶望の苦^にい味を噛みしめていた。
まるで墨を流したように、目の前がスウツと暗くなつていく。あ、失神する、と思
う間もなく、周囲が暗闇に包まれた。